

2025 年度西洋中世学会シンポジウム  
西洋中世における聖人崇敬の諸相

趣旨説明

菅野磨美

西洋中世において聖人は、祝日の礼拝や説教、聖人の遺骨などの聖遺物、聖人を描いた教会内外の聖像などを通して崇敬されてきた。聖人崇敬の一環で作成された聖人伝や、修道院や一般信徒が所有した聖務日課書やミサ典書、典礼用詩編等の典礼テキストは、中世キリスト教世界における社会や地理が、聖人崇敬によってどう形作られたかを今日に伝えている。

聖人崇敬や聖人伝に関する研究は、17 世紀にベルギーのイエズス会士らによって始められたボランディスト協会の聖人伝や教父伝集 *Acta Sanctorum* や *Vitae Patrum* の刊行まで遡ることができる。学術的な研究としては、聖人伝研究の礎を築いた 20 世紀初頭の Hippolyte Delehaye や、1960 年代に西洋の宗教学、社会、文学や芸術を理解するために聖人伝を資料として用いることを提唱した František Graus らの研究が挙げられる。その後さまざまな分野において聖人崇敬に関する研究がなされてきたが、分野や地域によっては、聖人崇敬に対する学問的な関心はまだまだ限局的であるのもまた事実である。これまでの聖人崇敬に関する研究史が示唆するように、テキストや図像・芸術作品の分析に基づく歴史的・社会的コンテキストの研究や、聖人崇敬の全体像を把握するための総合的・学際的研究は大きな課題となっている。

本シンポジウムは、歴史、文学、美術、音楽といった分野から、ドイツ、フランス、イングランド、イタリアの各地域における聖人崇敬を検討する。扱われる聖人は、聖ニコラウスなど、古典末期より広く崇敬されてきた聖人から、聖エセルスリス、聖オディリア、アッシジの聖フランチェスコ、アビンドンの聖エドモンドなど、中世のヨーロッパ各地で崇敬された聖人・聖女に及ぶ。各パネルでは、彼らが特定の時代や地域、修道院の内外で、テキストや図像、音楽といったメディアにおいて、どのように崇敬されていたのかを、聖人伝や典礼のテキスト、図像資料をもとに報告し、シンポジウム全体で西洋中世の聖人崇敬の諸相を示すことを目指す。くしくも 2025 年は、カトリック教会がローマへの巡礼者に特別の許しを与えたとした聖年 (Iobeleus) にあたる。ボニファティウス 8 世が 1300 年に定めて以来、中世では聖年に向けて聖人を列聖し、巡礼者向けに聖人を描いた作品が制作された。また、聖年にローマを訪れた中世の巡礼者の記録も残っている。2025 年もまた世界中の人々が聖なるものに心を寄せる時となるだろう。本シンポジウムは、パネリストらで網羅できない地域や分野においても、西洋中世学会という学際的な議論の場を通して、聖人崇敬や聖人伝に関して広く考える機会となることを目指したい。

「パトロンは誰か？—ホーヘンブルク修道院に見る 12 世紀の聖オディリア崇敬」

三浦麻美

盲目で生まれ、キリスト教の洗礼によって光を得たとされるアルザス公の娘、聖オディリア (720 年頃没) は眼病の治癒者、アルザスの守護聖人として、フランス北部からドイツ南部にかけ、中世を通じて広

く崇敬を集めた。14世紀になると、皇帝カール4世が聖遺物をコレクションに加えたことから、巡礼が広まったことが知られている。

その伝記『聖オディリア伝』は、父が創建し、彼女が修道院長を勤めたとされるホーヘンブルク修道院の関係者によって9世紀に書かれた。この作品は歴史的に不正確な記述を含み、オディリアのみに帰される奇蹟や伝承の創出には失敗したという評価を研究者から受けてきた。しかし、その特異さは具体的記述よりも、聖人の父エティチヨに聖オディリアに近いページが割くという構成上のバランスにある。10世紀作成されたザンクト・ガレン修道院所蔵写本が最古だが、12世紀に入ってから写本製作数が急増した。この背景には何があるのだろうか。

12世紀における聖オディリア崇敬の実態を把握し、そこで聖人伝が果たした役割を検証するため、本報告は当時ホーヘンブルク修道院長だったヘラートによる神学書『悦楽の園 (*Hortus deliciarum*)』を取り上げる。この作品は、12世紀宗教改革の中で女子修道院の知的レベル向上による改革推進を目的に著され、自由学芸のダイアグラム図や地獄図などの挿絵は著者ヘラートの意図を忠実に反映していると考えられている。中でも作品末尾にある、ホーヘンブルク修道院の歴史と修道女たちを描いた見開き2ページの図版に着目し、『聖オディリア伝』にあった聖人と創設者の関係の描写の変遷を把握することで、それによって修道院の歴史で聖人崇敬が果たした役割を明らかにしたい。

### 「13世紀の聖人崇敬の形成と聖人像の普及—アビンドンの聖エドマンズの伝記の比較検討」

北館佳史

本報告では、1246年に列聖されたカンタベリー大司教アビンドンのエドマンズの事例を通じて、教皇による列聖手続きが制度として確立されていく過程における聖人崇敬の在り方と、聖人像の生産と流通の実態を検討する。エドマンズはインノケンティウス4世によって列聖され、シトー会とドミニコ会という普遍的な修道組織の関与のもと、イングランドとフランスという異なる宗教的・政治的文脈において聖人像が形成され、普及していった。聖人の墓所となったポンティニー修道院では、聖遺物と奇蹟を中心とした崇敬が整備され、ドミニコ会士ヴァンサン・ド・ボーヴェの『歴史の鏡』では、説教者・教師としての側面が重視され、聖人像が広く拡散された。また、マシュー・パリによる伝記では、聖人は政治的迫害を受けた教会の自由の擁護者として描かれ、犠牲者的側面が強調されている。エドマンズは、学問と霊性、実践的な徳を兼ね備えた人物として、13世紀前半において理想とされた男性聖職者像を体現していた。彼に与えられた禁欲者、学者・説教者、司牧者、奇蹟を行う「天上の医師」といったイメージは、語り手の立場や受け手の関心に依拠して選択的に強調され、ラテン語聖人伝や俗語韻文伝記、典礼の歌詞、説教のエクセンプラといった多様なメディアを通じて広く社会に浸透していった。こうした列聖と崇敬の展開は、制度化された列聖の枠組みのもとで形成された聖人像が、宗教的・政治的文脈と結びつきながら、修道会、宮廷、さらに広い信徒層へと受容されていく過程を示している。エドマンズの伝記を比較検討することで、語り手や受け手の関心、そして用いられたメディアに依拠して、聖人像が意図的に調整されていったことが明らかとなる。こうした聖人像の動的なあり方は、聖人という存在が多様なアクターのあいだで果たすべき役割をめぐる、不断の調整と交渉の対象となっていたことを示している。

## 「中英語聖人伝写本の編纂にみる中世後期イングランドの聖人崇敬—Osbern Bokenham『黄金伝説』を中心に」

菅野磨美

中世後期イングランドでは、数多くの聖人伝が編纂され、13世紀以降、中英語で書かれた聖人伝集は、収められたテキストの内容や数、編纂された写本の数など多様性に富む。その中でも、サフォーク・クレア修道院のOsbern Bokenham (ca. 1392-1464) による『黄金伝説』は、長らく失われた書物とされてきたが、2005年の写本の再発見によって、新たに中英語聖人伝のコーパスに加わった作品である。本作品は、ヤコブス・デ・ウォラギネの『黄金伝説』の中英語訳であると同時に、Bokenhamがイングランドの地理や歴史について著した別の作品『マップラ・アングリアエ』で述べるように、ブリテン諸島の聖人・聖女が新たに追加されているのが特徴である。

本発表では、『黄金伝説』に収められたブリテン諸島の聖人伝の中でも、7世紀イーリーの女子修道院長だった聖女エセルスリス (*d.* 679) を取り上げ、中英語聖人伝集にイングランド固有の聖人伝が編纂された一例を報告する。二度の結婚にもかかわらず処女を守り、死後、聖遺体が腐敗することなく発見された奇跡で知られるエセルスリスは、Bokenhamが活動の拠点としていたイースト・アングリア地方を代表する聖女であり、サフォーク出身のBokenhamにとっても身近な存在であったと考えられる。Bokenhamは、自分の故郷の聖女の生涯を詳説するとともに、大陸で広く崇敬されていた古典後期の聖人・聖女らを取る『黄金伝説』という文脈に彼女の聖人伝を置くことで、イングランドを代表する聖人としてのエセルスリスの地位をテキスト上にも確立しようとしたのである。

## 「聖人崇敬と音楽—聖ニコラウスの典礼劇」

吉川文

中世における聖人崇敬と音楽が密接に結びついた例として、本報告では「典礼劇」を取り上げる。中世の演劇では、聖書で語られる主の受難や復活、あるいは生誕の物語と並び、聖母や諸聖人の奇蹟の物語、聖人伝が取り上げられた。13世紀末以降に隆盛した、その土地の言葉による奇蹟劇などの演劇は、もちろん音楽に彩られた部分もあったようだが、その役割は限定的である。一方、俗語の演劇に先駆けて発展し、大きな影響を与えたラテン語の典礼劇は、全編通して歌われた。

典礼劇の起源のひとつとされるのが、復活祭のミサ冒頭の入祭唱に付加された、天使とイエスの墓に詣でるマリアたちとの会話である。聖歌から発展したこの部分は、所作や扮装を伴いながら *Visitatio sepulchri* (墳墓訪問) と呼ばれる数多くのレパートリーを生み出した。イエスの復活にまつわる物語に加え、その生誕を扱うものなど、典礼劇は聖書に題材を求めるものが多いが、聖人伝に基づく希少な例として、ここでは聖ニコラウスの典礼劇を取り上げる。

小アジア、ミュラの大使ニコラウスは325年の第1回ニカイア公会議にも出席したとされ、数々の奇跡譚に彩られる。1087年には北イタリア、バーリへ移葬され、ヨーロッパ全域で広く崇敬を集めた最

も有名な聖人と言える。現代のサンタクロースにまで繋がる数々の逸話のうち 4 つの物語が、サン・ブノア・シュル・ロアールのフルリ修道院に伝えられた写本に典礼劇として所収される。この写本は 10 編の典礼劇をまとめて筆写した部分を含み、すべて楽譜付であることから注目されてきた。『フルリ戯曲集』とも称されるこの 10 編の冒頭を飾るのが、聖ニコラウスの聖人伝に依拠する「三人の娘」「三人の学徒」「聖ニコラウスとユダヤ人」「ゲトロンの息子」の 4 編である。それぞれ音楽の利用のあり方は様々で、特に「ゲトロンの息子」には特有の創意が認められ、音楽を通じた聖人崇敬の一つのあり方として興味深い点を指摘できる。

## 「フランシスコ修道会における聖人崇敬と美術」

荒本文果

本報告は、アッシジの聖フランチェスコ（1181/82 年–1226 年、1228 年列聖）を「もうひとりのキリスト（alter Christus）」として崇敬する思想とその図像表現が、フランシスコ会に関わる他の聖人や個人の顕彰にも深く関与していた可能性を示すことを目的とする。

「小さき兄弟会」の創設者フランチェスコは、『遺言』において華美な聖堂の所有を禁じていた。しかしながら、フランシスコ会は建築・絵画・彫刻といった視覚芸術を、聖人たちの記憶を継承し、信徒の信仰心を喚起する手段として積極的に活用する道をたどった。よく知られるように、フランチェスコ列聖の翌日に教皇グレゴリウス 9 世（在位 1227–1241 年）がアッシジのサン・フランチェスコ聖堂の建設を命じており、その内部は板絵やフレスコ画によって豊かに装飾されていった。

「もうひとりのキリスト」としてのフランチェスコ像の形成は、フランシスコ会美術を特徴づける思想のひとつである。チェラノのトマスやボナヴェントゥーラは、1224 年にアレッツォのヴェルナ山において神がフランチェスコに聖痕を与えたとしており、この出来事によって「第 2 のイエス」としてのフランチェスコ像は最高潮に達する。そしてフランシスコ会においてこのイメージは、説教・絵画・彫刻を通じて意識的に、あらゆる方法で繰り返し表現されていくこととなる。

本報告では、この思想が時代を経て、フランシスコ会の聖人シエナの聖ベルナルディーノ（1380–1444 年、1450 年列聖）に捧げられた 15 世紀の礼拝堂壁画装飾にも影響を及ぼしていることを指摘する。さらに、フランシスコ会出身の教皇たちによる美術事業についても、同会の思想および図像的伝統との関連から再検討されるべきであることを提言する。